
白雪姫

水永 杏里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白雪姫

【Zコード】

Z6689F

【作者名】

水永 杏里

【あらすじ】

主人公の伴田みなみが、不思議な世界に迷い込んでしまったお話をします。

第一話* 夢の始まり（前書き）

主人公も不思議な世界に飛ばされていますが、文章もぶつ飛んでたりします。頑張りますが、もしもの場合は許して下さい。

第一話*夢の始まり

「ばいばーい」

「また明日ねー。」

私はみんなに挨拶をすると急いで駅の改札を通りた。

改札といつても都会のよつた機械ではなく、駅の職員さんが一人で切符をカシャンとするものだ。

都会の人には考えられないかもしだいが、人が少ないのでそれで十分成り立っている。

朝は少し高校生で混雑しているけど……。

私はいつも通りに定期券を見せ、いつも通りの一両目に座った。

今の時期の6時電は3年生が卒業しているので、人気が少なく、乗っているのは私と、瘦せている中年のおじさんと、30くらいの化粧の濃い女人の人だけだ。

2人とも外を見ている。

別に外には木しか無いのに。

いつもは終電で帰るが、最近春季課外のおかげで早く帰れている。

まあ課外が無いのが1番嬉しいのだけれど……。

汽車の中は適度に暖かくて眠くなってきた。

浅い眠りだったので、アナウンスが流れる度 目が覚めた。

「次は～駅。～駅。」

そろそろだと想い、眠い目を開け、マフラーを巻いた。

その後ドアに近づき外を見た。

しかし、窓は曇っていて何も見えない。

その瞬間にドアが開いた。

プシュー ガタン

開いた瞬間私は頭が真っ白になつた

目の前には何も……ない

いや、語弊がある。

あるのは森と、舗装されていない道路だ。

そして私は道の真ん中に立つてゐる。

振り返ると、今まで乗つっていた電車も、駅もない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6689f/>

白雪姫

2010年10月30日05時16分発行